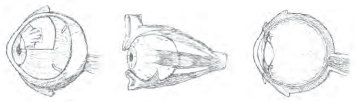
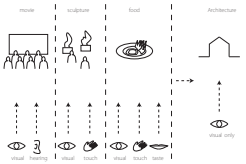
見立てのケンチク

1. 本研究の目的と方法





人は生涯得る情報の８割を視覚から取り入れる。過去にダ・ヴィンチやゲーテらも視覚を五感の中で一番崇高なものととらえていた。建築や空間の第一印象を決めるものも視覚である。このことから建築は見られる事に重きを置く芸術と考える。まず、視覚と建築の関係を調べ、そこに西洋美術と日本美術の違いが見て取れた。日本美術の表現手法の中の「見立て」に注目し、調査・分析をし、それを設計手法を確立させ、実際の敷地を選定し、建築に発展させることを本論文の目的とする。

1-1. 視覚と建築の歴史

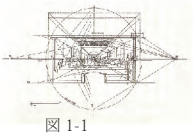


図 1-1
最後の晩餐の分析図

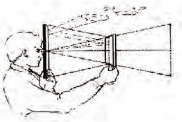


図 1-2
ブルネレスキの実験装置

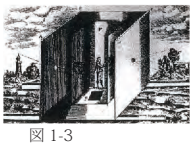


図 1-3
カメラ・オブスキュラ

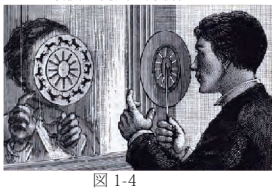


図 1-4
フェキナスティスコープ

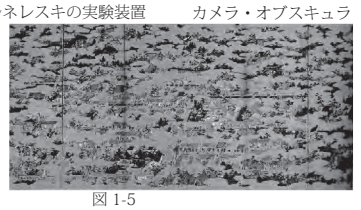


図 1-5
紙本著色洛中洛外図屏風・歴博甲本

1-2. 西洋美術と日本美術

日本美術と西洋美術の決定的な違い、それは「見る行為の違い」で、見ている対象をいかに表すかの違いであった。

European — 目に見えているものに集中して科学的・客観的に対象を分析し、写実的に表そうとした。

Japanese — 写実的に表すことに興味はなく、目に見えているものから、今目前にないものや、他のイメージを想像させた。

図 1-6 Japanese Art

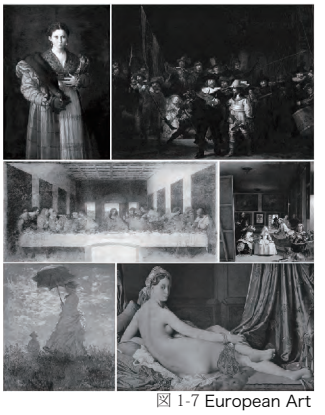


図 1-7 European Art

2. 見立て

日本の伝統的な美術表現の「見立て」に注目してみる。日本の美術は外から入ってきたものの良い部分を取り入れ自分のものにしていく似せる作用がとても強い文化であった。「見立て」とはあるものとものの類似性を強調させ、対象を別の物で表現する手法であり、美術だけでなく、文化・生活にまで広く、深く浸透している。

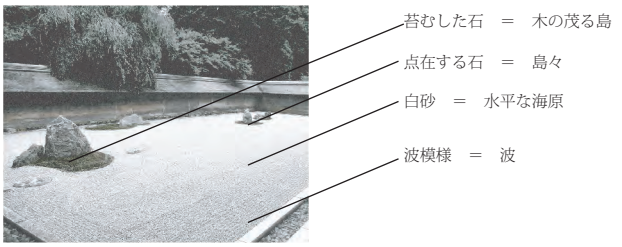
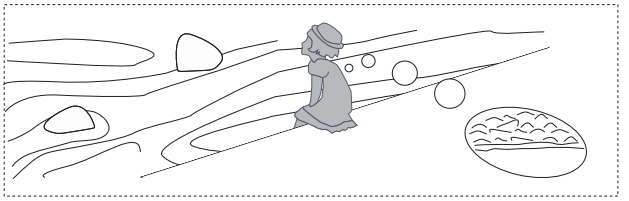


図 2-1 見立て　例）龍安寺石庭



この日本芸術に多く見られる「見立て」という手法

「見立て」　＝　ある物の様子から、それとは別の物の様子を見て取る事、重ね焼きする手法。

2-1. 見立て 88 景

「見立て」は例えば、描かれている絵や、庭の石の配置に古典や故事が隠されていて、見ている物と他の物をダブルイメージするような表現である。設計手法を確立させるために「見立て」を収集し、分析していく。文化・芸術・生活の中から無作為に収集していくものとする。

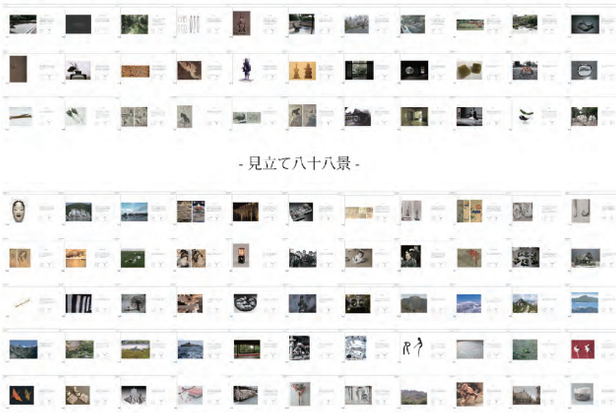


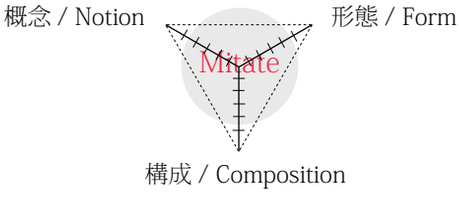
図 2-2 見立て 88 景

2-2. 分析

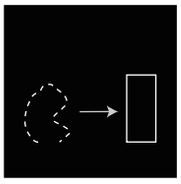
図 2-3 mitate 88

製本化し、分析する。3 つのパターンが見えてきた。「見立て」とは 3 つのすべてに関ることで初めて成立すると考える。

3 要素
- 概念 / Notion
- 構成 / Composition
- 形態 / Form

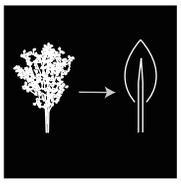


ミタテスゴロク



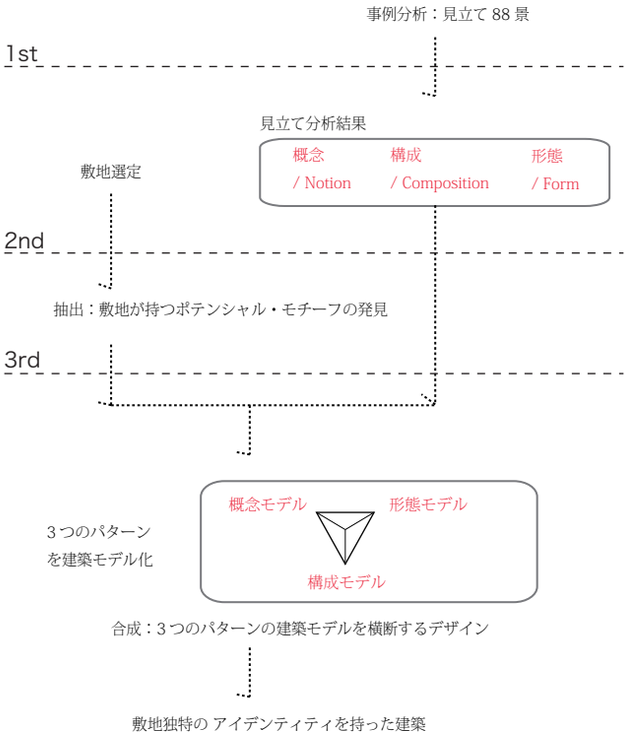
■ 概念を見立てる / Notion
モチーフの世界観・雰囲気などに形を与える見立ての要素。形がなく観念的なものなどを見立てるときに使われる見立て。見立てにわかりやすさを与える。

■ 構成を見立てる / Composition
モチーフの組み合わせや、配置を見立てたもの。大きすぎてわからないものなどを見立てるときに使われる見立ての要素。



■ 形態を見立てる / Form
モチーフが持つ形を抽象化しつつ、簡略化された形にする見立ての要素。この要素は見立てに愛着を与える。

2-3. 設計手法



「見立て」から得られた設計手法の可能性として、公共建築設計への展開を考える。効率が優先され、場所性とは関係のない設計が氾濫している地方の公共建築へのアンチテーゼとして、「見立て」の設計手法を位置づける。「見立ての設計手法」はその場所から得られるデザインで建築を作ることで、地域のアイデンティティを喚起したり、使う人たちに愛着がわくデザインが可能性があり、公共建築規模の大きさにすることが効果的と考えている。

3. 敷地

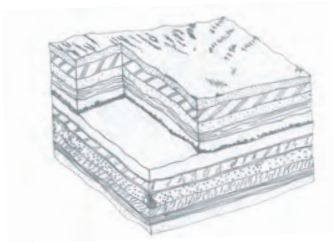
図 3-1 青森県十和田市

本研究で得られた設計手法を実際の敷地で展開していくことで、この設計手法という仮説を検証する。敷地は青森県十和田市。大手百貨店の相次ぐ撤退により、街は荒廃しかけていた。しかし、3 年程前に十和田現代美術館が完成し、その周辺はにぎわいを取り戻しつつあるが、街は中心が空洞化しつつある。市の再開発計画にある市民図書館の改築をする、その土地に根ざしたデザインの図書館を設計し、建築のデザインを地域に還元していく。

3-2. 十和田からのモチーフ

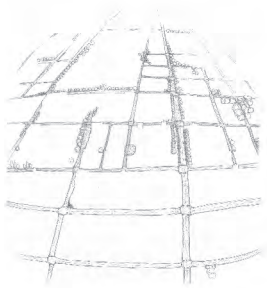
十和田らしさをもった建築をめざすため、十和田というモチーフからデザイン要素を抽出する。形態・構成・概念のそれぞれにあったものを選び、建築のモデルに発展させる。

概念 …… 開拓



十和田は日本三大開拓地の一つで、1855 年人工河川が引かれマチが発展した。しかし、現在のマチにはそれを記すものはない。この開拓の概念を建築で表現する。

構成 …… 格子状の街区が整然と連なる



何もない荒野にグリッド状の都市計画がされている。格子状の街区により整然とした町並みが続く、十和田のマチを構成している主要素と言える。

形態 …… 水平性

十和田はほとんど高低差がないマチ。その平たい大地に低層の建物がばらばらと建つ。普段の生活をしていて、その雄大さに気づくことはない。この雄大さを建築で表現する。

4. 建築モデル

十和田から抽出されたモチーフを見立てた建築モデルを作っていく。概念モデル・構成モデル・形態モデルそれぞれ数種類作り、図書館という機能を考えつつ合成をしていく。合成をしていく過程で原型モデルの良いところを残しながら、次のモデルの形を融合していく。

example

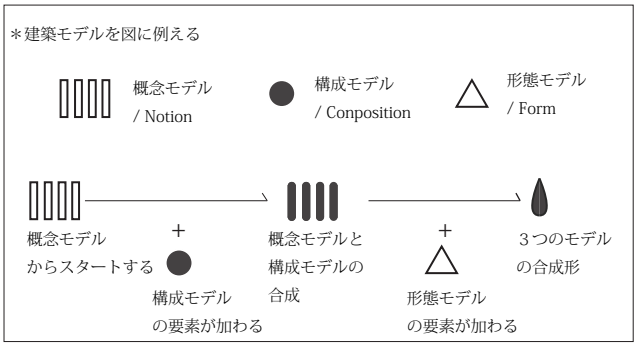


図 4-1 study models

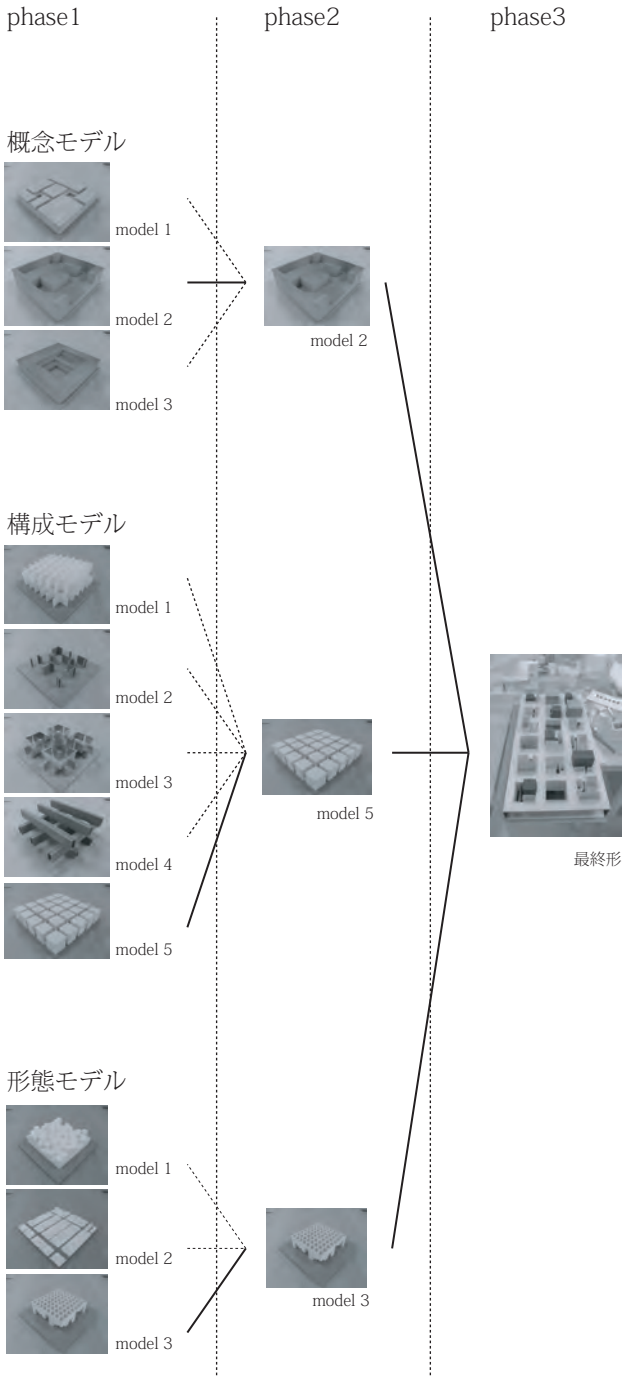
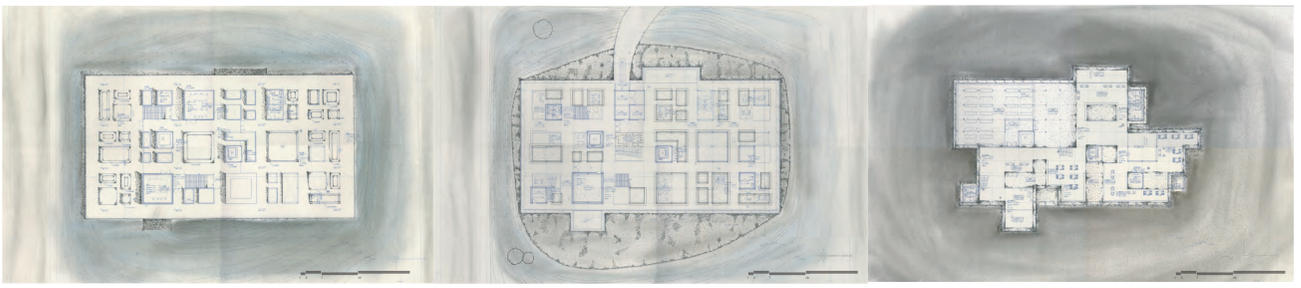
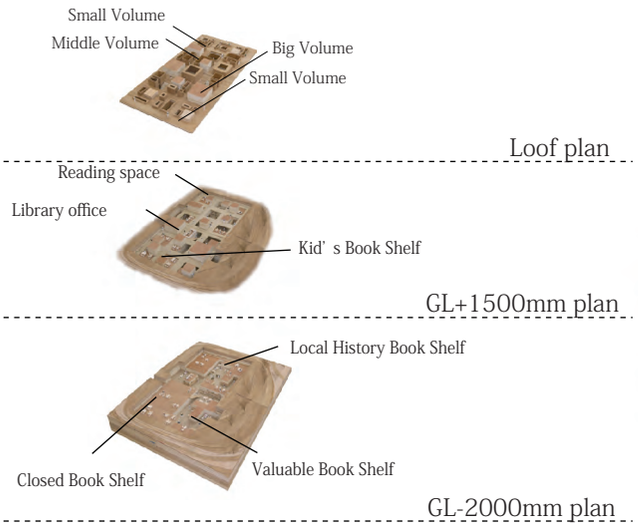


図 4-2 プロセス樹形図



Loof plan　　1F plan　　B1F plan



7. 平面計画

図書館の平面は事務ゾーンを一般開架と児童書庫で挟んでいる。騒音を妨げる意味もあるが、これは、十和田市のマチ全体の配置の見立てともなっている。中心に公共施設があり、その周りに個人の家が散らばる構成となっていることとリンクしている。

8. 断面計画

構成 : 水平性

地上から少しだけ浮いているフラットな人工地盤。その上になだらかにヴォリュームがある。十和田の水平性を見立てた。

形態 : 格子状街区

グリッド状の動線で十和田のマチの動線を見立てている。この図書館で本を探す行為ははマチを散策している感覚とリンクする。

概念 : 開拓

十和田を発展させた開拓精神を見立てたもの。元々の地形を掘り込んでそこに空間ができる。貴重な資料室や、郷土資料の展示室になっている。壁は残土とモルタルを混ぜて吹き付けている。マチの歴史とふれあう場所。

9. 終わりに

普段の生活の中でマチのことを思うことは少ない。「見立ての設計手法」によって作られた、十和田を見立てた図書館。この建築を使うことはマチ全体を所有した感覚に近く、その土地のルールから出来た建築は地域のアイデンティティを喚起し、場所の象徴性を持った建築ができる。